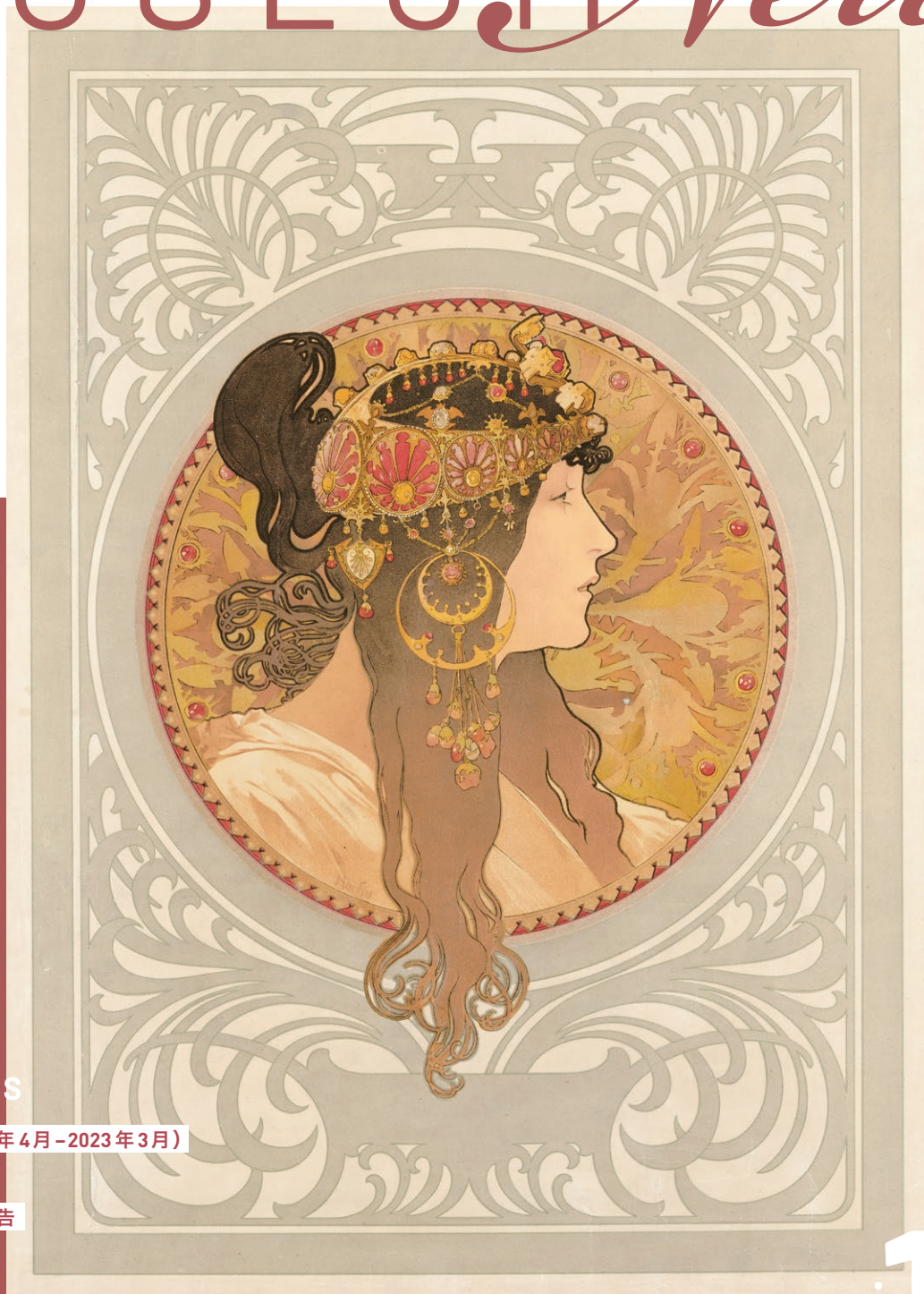


ALPHONSE

堺 アルフォンス・ミュシャ館 [堺市立文化館]  
ミュージアムニュース

# MUCHA

## MUSEUM *News*



彼女だけに  
許された表情。

### CONTENTS

展示報告 (2022年4月 - 2023年3月)

教育普及活動

主な作品修復報告

館外イベント

講座

作品紹介

コラム

VOL. 12

# アンニュイの小部屋

アルフォンス・ミュシャと宇野亞喜良

会期：2022年4月9日(土)～7月31日(日)



桜が散ったら、雨が続いたら、  
小さな美術館で「アンニュイ」に  
酔いしれませんか？

## アンニュイ 仏：ennui

物憂さ、気だるさなどの気分、あるいは雰囲気。原義は「退屈」だが、日本語においては「夢げ」「神秘的」など独特の前向きなニュアンスを含む。

花々に囲まれた女神が優しくほほえむ——  
ミュシャの絵はこのように語り継がれますが、その表情は“ほほえみ”にとどまりません。本展は代表的な装飾パネルを中心にミュシャ作品の華麗さに見え隠れする憂いの表情に注目しました。さらに、印象的な少女像で知られるイラストレーター・宇野亞喜良(1934-)の作品約50点を特別出品することで、両者の描く“アンニュイ”な魅力に浸っていただく空間となりました。宇野の大規模コレクションを所蔵する刈谷市美術館の多大なるご協力、そして宇野先生ご本人にも背中を押していただいたことから、かつてなき2人展が実現に至りました。(M.T.)

## ガイドシート『美意識の交差点』

これまで交わってこなかった両者の数々の作品が一堂に会する本展でこそ見えてくる、MUCHA ワールドと AQUIRAX ワールドが交差する地点を8つのトピックからガイド。

### トピック

グラデーション / 蛇 / アイデア / 男装劇 / シンボル / 装飾画 / 横顔 / 少女



## 企画展関連イベント

### 学芸員による作品解説ツアー 5月・6月・7月

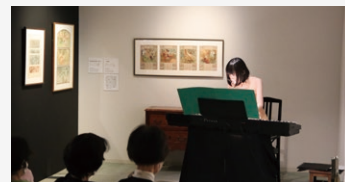
初めてご来館された方も非常に多かった本展。当館コレクションやミュシャについて紹介しつつ、描かれた女性の表情の魅力味わうという、ミュシャ作品の新しい楽しみ方を提案しました。



作品解説ツアーの様子

### アンニュイなピアノコンサート

ミュシャの絵に囲まれた展示室のなかで、サティの「ジムノペディ」など計4曲を電子ピアノで演奏。アンニュイな午後のひとときをお楽しみいただきました。



コンサートの様子

日時	6月26日(日) ①13:30~14:00 ②15:30~16:00
演奏	金井亜沙美(ピアニスト)
演奏曲目	エリック・サティ 「ジムノペディ」 / エリック・サティ 「薔薇十字教団の鐘の音」から「大僧院長の歌」 / レオシュ・ヤナーチェク 「草かげの小道にて」から「みみずくは飛び去らなかった」 / 武満徹 「ピアノディスタンス」

## EVENT

# 展示 + 構成

小部屋に見立てた5つのセクション(2人の“個室”もあれば“相部屋”も)で構成。  
時代をこえて2人の画家が交差する小空間をお楽しみいただきました。

## ROOM 1 MUCHA 世紀末の光と影

ミュシャの絵は、  
優美で華麗だけじゃない

大型油彩画《ハーモニー》を中心に据え、その左には華やかな《四つの花》などの装飾パネル、右には『主の祈り』などの象徴主義的作風を対照的に紹介。ミュシャの美の二面性を示しながら、花々に囲まれた女性の物憂げな表情にご注目いただきました。



## ROOM 2 AQUIRAX 典雅な倦怠感

スキャンダラスで叙情的、  
宇野亞喜良の1960年代

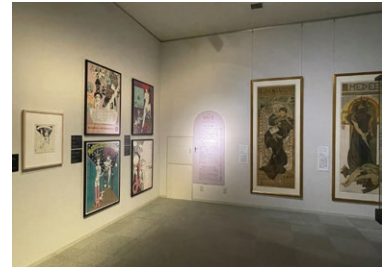
宇野のイラストレーションに少女像が開いた1960年代の作品を紹介。詩人・劇作家の寺山修司の詩に挿絵を寄せた『For Ladies』の原画を中心に、同時代の女性が抱える“涙を含んだ感情”を映し込むようなイラストレーションの世界を味わっていただきました。



## ROOM 3 MUCHA+AQUIRAX 華やかで儂い舞台

閉じ込められているのは、  
それぞれの時代の美と熱狂

ミュシャと宇野が各々の時代で衝撃を与えた演劇ポスターが集結。画風は異なるものの、男装劇を扱っていることや、描いたモチーフが実際の舞台の小道具になったこと、装飾の手法など、重なり合う部分も。千秋楽とともに役目を終えるポスターの美に浸っていただきました。



## ROOM 4 MUCHA 通り過ぎていく者たち

時を司るヴィーナス、その表情は

ある絵に記されたミュシャの言葉“通り過ぎる風は若さを奪い去る”を手掛かりに、うつろいゆく概念(季節、月、太陽、星、人生)が描かれた作品を集めることで、自ずとアンニュイな表情の女性像が集う空間に。またソファでゆったりと作品と向き合うコーナーも。



## ROOM 5 MUCHA+AQUIRAX アンニュイな少女たち

微笑まない少女が見つめる先

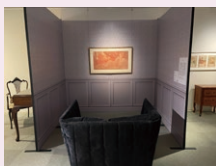
1900年パリ万博閉幕後、ミュシャは憂鬱に襲われ、その関心は祖国チェコへ。1904年の『装飾人物集』には、意志を秘めたような表情の民族衣装の少女が多く登場します。最後の部屋では、ミュシャと宇野の描く微笑まない少女たちが集い、時代を超えて呼応し合いました。



## RELATION PROJECTS 1

### ennui×ローソファ専門店HAREM

堺市のローソファ専門店HAREMとのコラボレーションが実現。2台のソファを展示室内にご用意することで、アンニュイな鑑賞時間をお過ごしいただきました。



**KAKOMI SOFA**  
かこみソファ

ひとつの作品を独り占めできる、贅沢なプライベート空間。

後期展示：黄道十二宮



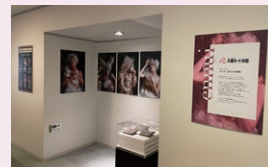
**PUZZLE SOFA**  
パズルソファ

季節の風景が描かれた作品を眺められる、リビングのような空間。

## RELATION PROJECTS 2

### ennui×大阪モード学園

大阪モード学園の学生とのコラボレーション。メイク・ネイル学科は、「ミュシャ」と「アンニュイ」をコンセプトに写真パネル作品を制作。また、スタイリスト学科は装飾パネル《四つの花》をテーマに、ディスプレイ装飾の技法である「ピンワーク」などを使用したスタイリング作品を制作。会期終了後は、あべのキューズモール内でも展示されました。



メイク・ネイル学科



スタイリスト学科

# ミュシャとおとぎの国の姫君たち

会期：2022年8月6日(土)～11月27日(日)



時に気高く、  
時に勇敢で、  
恋もする姫君たち

挿絵画家から画業を始めたミュシャは、雑誌や新聞の連載小説、歴史書や児童書、美しい装飾本の物語を彩り、生涯で250以上の書籍に携わりました。しかし、ミュシャの物語世界は“本”の中だけにとどまりません。ミュシャを有名にしたのは演劇ポスター。芝居のストーリーへと誘う象徴的なモチーフ使いは、ミュシャのポスター手法のひとつです。さらに、壁画や油彩画という巨大なカンヴァスを使って、歴史物語や小説の場面表現を試みています。

それぞれの画面に合わせて描かれる物語は、時に写実的な描写で行間を埋め、時にドラマチックな構図によって登場人物たちに生命を吹き込みます。本展は、ミュシャが描いた物語にまつわる作品を中心に、実際の物語のあらすじとともに、作品制作にまつわるミュシャの物語も合わせてご紹介しました。ミュシャをとりまく物語の世界にどっぷりと浸っていただけたのではないのでしょうか。(Y.H.)

## 企画展関連イベント

### おとぎの国MAPで宝さがし!

企画展開催中、「おとぎの国MAP」を無料配布。7つの島(テーマ)で絵の中に描かれた“ジュエリー”を探します。子どもたちにはシールラリーとして楽しんでもらいました。



### ギャラリーツアー&子どもむけ対話型鑑賞ツアー

展示の主要作品をピックアップしての解説ツアー。子ども向けには子どもたちの気づきを中心にすすめ、親子でも楽しめる対話型の鑑賞となりました。



### ワークショップ

#### MY MUCHA MUSEUM (わたしだけの小さなミュシャ館)

日時：8月28日(日)11:00～

好きなミュシャの作品を紙の上に“展示”して飛び出すカードに仕上げました!



### 映画上映

#### シラノ・ド・ベルジュラックに会いたい!

日時：9月17日(土) ①10:30～ ②14:00～

ミュシャとサラ・ベルナルルゆかりの詩人で劇作家のエドモン・ロスタンの代表作にして、現在も世界中から愛されるフランスを代表する戯曲「シラノ・ド・ベルジュラック」誕生の物語。ミュシャが生きた19世紀末のパリも堪能できるフレンチ・コメディをお楽しみいただきました。



© LEGENDE FILMS - EZRA - GAUMONT - FRANCE 2 CINEMA - EZRA - NEXUS FACTORY - UMEMIA, ROSEMONDE FILMS - C2M PRODUCTIONS



## 展示構成

姫君の  
運命と個性を  
7つのテーマで  
展覧。

## 気高き姫君

*Noble Princess*

姫君が語りかけるのは、  
ボスニア・ヘルツェゴビナの歴史物語



アルフォンス・ミュシャ 1900年 パリ万国博覧会 ボスニア・ヘルツェゴヴィナ館壁画く下絵> 1899-1900年 墨、紙 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

ミュシャが1900年のパリ万博で描いたボスニア・ヘルツェゴビナ館の壁画のひとつ、《ボスニアから1900年のパリ万博への捧げもの》から、ボスニアの擬人像である姫君を当館所蔵の貴重な下絵で紹介。玉座から手を広げ、ボスニアの豊かな恵みと国の歴史を観る者へ伝えています。

展示ポイント！



全長40mにも及び壁に描かれたボスニアの神話と先史から近代までの歴史物語。

現在、壁画の現物は、フランスのオルセー美術館とチェコの国立ブラハ工芸美術博物館が部分的に所蔵しており、展示では当館所蔵の下絵に両館から借用した画像で制作したタペストリーを組み合わせ、約1/2~1/3のスケールで再現。水彩とテンペラで描かれた鮮やかな壁画の全貌がミュシャ館によりがえりました。

## エキゾチックで魅惑的な姫君

*Exotic, Bewitching Princesses*

煌びやかなジュエリーをまとう  
彼女たちに誘われる異国への扉



19世紀末のヨーロッパで流行した、アジアや中東文化の異国趣味につながる文学作品『ラマ』、『サロメ』、『サランポー』に寄せた作品と《ビザンティン風の頭部》を展示。ミュシャが古今東西のジュエリーデザインから着想を得た装飾品にも注目しました。

## 悲劇の姫君

*Tragic Princess*

女優サラ・ベルナルが演じるのは、  
いつも悲しく、切ない運命



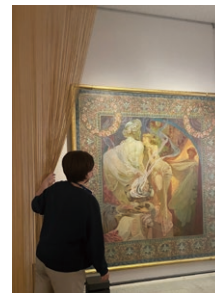
ミュシャが描いた演劇ポスターから『椿姫』、『メディア』、『ハムレット』をご紹介します。ミュシャは、サラが舞台上で表現した主人公が抱える愛いや苦悩、決意、怒りの感情を満ちた表情をとらえ、物語の行く末を象徴的なモチーフで描いています。

## 秘密の姫君

*Mysterious Princesses*

情熱的で密かな恋心。

わたしたちもこっそりのぞいてみましょう



作品の前にカーテンを設置し、絵の中の人物と同じ気持ちに！

ローマ時代が舞台の歴史小説をもとに描いた《クオ・ヴァデイス》。奴隷の少女が恋する主人の石像に口づけしようとする場面です。実は、背後から覗く人物は小説には書かれていません。この人物が誰なのか想像しながら鑑賞をお楽しみいただきました。

## おとぎの国の姫君

*Princesses from the Land of Fairytale*

幻想の中で出会う恋の行方。  
そして魔女やドラゴンのいる  
ファンタジーの世界へ



130ページを超える全ての挿画をミュシャが手掛けた小説、『トリボリの姫君イルゼ』の貴重な全ページ展示が実現し、ミュシャの美しく豪華な挿絵をご堪能いただきました。また、童話の挿絵や『おばあさんたちの物語』、チェコのおとぎ話《ヒヤシンス姫》など、ファンタジックな作品もご紹介しました。

ロベルト・ド・フレール(著) アルフォンス・ミュシャ(画) 『トリボリの姫君イルゼ』1897年 書籍 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

## 冒険を愛する姫君

*Princess with a Love of Adventure*

宮殿より森が好き。  
姫と白い象の友情がたぐ物語



ラオスやタイ、インドを舞台にした白い象の波乱万丈の物語、『白い象の伝説』を紹介。お互いを思いやりながら育む王子や姫君たちとの友情の物語を貴重な下絵とともに展覧しました。

『白い象の伝説』トリボリの姫君イルゼ』から、めくって鑑賞できる高さ120cmの巨大絵本



ジュディット・ゴートエ(著) アルフォンス・ミュシャ(画) 『白い象の伝説』1894年 書籍 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

## 未来の希望、スラヴの姫君

*Slavic Princesses and a Hope for the Future*

スラヴの神々に見守られ、  
チェコの団結と未来へ導く少女たち



チェコ時代のポスターは、フランス時代の成熟した人物像とは異なり民族衣装の少女たちが多く描かれています。背後には守護神のようにスラヴの神々が描かれ、チェコの寓意像ともされる彼女たちに、ミュシャは未来への希望のメッセージを込めています。

アルフォンス・ミュシャ 《第6回ソコル祭》1912年 リトグラフ、紙 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

## Bon Voyage! ～ミュシャと巡る旅～

会期：2022年12月3日(土)～2023年4月2日(日)



チ  
ェ  
コ  
発  
の  
旅  
由  
、  
パ  
リ  
の  
79  
年

コロナ禍で旅に対する憧れや欲求が高まっているここ数年。アルフォンス・ミュシャの作品で旅を楽しめる展覧会を開催しました。ミュシャが活躍した19世紀後半のヨーロッパでは、産業革命がきっかけで鉄道や蒸気船といった交通手段が発達し、旅がより身近になった時代でした。そしてこのような社会の近代化は、芸術のあり方や価値観にも大きな影響を与えました。ミュシャはこの急激な変化の中、時代に沿った作品を制作し、また自身が芸術家としてやりたいことを成し遂げるために模索し続けました。

本展は2部構成で、世界各地にゆかりのあるミュシャの作品を紹介する第1部「作品で巡る旅」、そしてミュシャの画業の変遷をたどる第2部「生涯と画業の旅」としてご紹介しました。グローバルに活躍し、総合芸術家として多種多様な制作をしたミュシャの作品と人生を旅気分で見学いただけただけではないでしょうか。(Y.K.)

## 企画展関連イベント

ワークショップ  
チェコビーズで  
ミュシャの作品をイメージした  
オリジナルジュエリーをつくらう

12/17(土)、1/21(土)、2/23(木・祝) 10:30～13:30～  
講師：Latief(ラティーフ)

ミュシャの作品には華やかなジュエリーで着飾った女性たちがたくさん登場します。彼女たちをイメージしたアクセサリをチェコのガラスビーズでつくるワークショップを開催しました。参加者の皆さまは、ピアス、イヤリング、ネックレス、チャームから1つを選んでミュシャ風のオリジナルアクセサリを作りました。各回ほぼ満席のお申込みをいただき、盛況のうちに終わりました。



ワークショップ  
ミュシャ・スタイルの  
グリーティング・カードを  
つくらう

12/18(日)、1/14(土)、2/19(日)、  
3/21(火・祝)(予定) 11:00～15:00

ミュシャのデザインモチーフを自由に組み合わせ、オリジナルのグリーティング・カードをつくるワークショップを開催しました。「Bon Voyage!」「Merci」など4種類の台紙から1つを選び、個性豊かなカードがたくさんでき上がりました。



## EVENT

学芸員による  
作品解説ツアー  
1・2・3月

世界各地にゆかりのある作品、激動の時代を駆け抜けたミュシャの画家人生を巡る旅の見どころをご案内しました。



作品解説ツアーの様子

## 公式ブックレット

18ページ(フルカラー)500円(税込)

本展限定の解説本。  
作品を深掘したコラムなど、  
ミュシャの魅力が満載。

# 展示構成

☆☆☆

## 第1部 作品で巡る旅

An Odyssey of Art

### フランス各地のポスター

Poster Orders from Every Corner of France



《モナコ・モンテ＝カルロ》1897年 リトグラフ、紙  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

19世紀後半はフランス全土に鉄道網が張り巡らされ、これまでよりも多くの人にとって、旅行が身近になった時代でした。また石版印刷技術の発達に伴い、工場で大量生産された商品をPRするためのイラスト入りの大判ポスターの需要が高まった時代でもありました。そうしたポスターを描く画家としてパリで大成功をおさめたミュシャ。発注元はフランス全土にわたり、西部の街ナントの製菓会社、南部の街ベルビニヤンのタバコの巻紙製造会社、フランス東部からベルギー、オランダに流れ着くムーズ川の名前をとったビールの製造会社などで、多くの商品ポスターを描きました。

### パリから異国へ

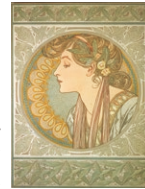
Paris: Springboard to the World



ジョルジュ・フーケの宝飾店内 1900-1902年  
カルナヴァレ美術館蔵



《蛇のプレスレットと指輪》  
1899年 金、エナメル、  
オパール、ダイヤモンド  
堺 アルフォンス・ミュシャ館  
(堺市)蔵



《月桂樹》  
1901年 リトグラフ、紙  
堺 アルフォンス・ミュシャ館  
(堺市)蔵

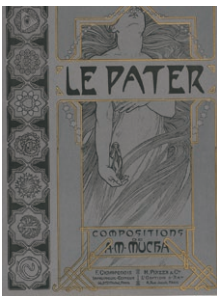
ヨーロッパ諸国が世界中に植民地を広げ、海外との行き来が活発になった19世紀後半、大都市では万国博覧会が頻繁に開催され、世界中の文物を目にすることができました。ミュシャはパリにいながらも異国風のデザインを巧みに作りだしました。彼がポスターや装飾パネルに描いた女性たちには、エキゾチックな魅力があります。ミュシャの仕事はポスターのデザインにとどまりませんでした。アール・ヌーヴォーを代表する宝飾芸術家ジョルジュ・フーケと共作した《蛇のプレスレットと指輪》をはじめ、ジュエリーデザインや店舗内装デザインなどを行い、装飾芸術家としても活躍しました。

## 第2部 生涯と画業の旅

Voyage through  
Life and Painting

### パリからアメリカへ、精神世界への旅

From Paris to the US, an Expedition to a More Spiritual World



『主の祈り』(仏語版) 1899年 書籍  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

ミュシャの旅は神秘の世界にも広がっていきます。科学技術の進歩で様々な事象が解き明かされ、物質的な豊かさが追求される一方で、逆に不可視なものに対する興味が世間の注目を集めていた当時。ミュシャもオカルトなど目に見えない世界に興味を持ちました。

スラヴ民族の歴史を描いた大作《スラヴ叙事詩》で祖国に貢献することを決意したミュシャは、制作資金を集めるため1904年にアメリカ大陸へ出発しました。同じ頃、キリストの祈りをオリジナルに視覚化し

た書籍『主の祈り』で宗教画家としても知られるようになり、イスラエルのエルサレムに建設予定だった聖母マリア教会のステンドグラスのデザインを依頼されます。やがてこのデザインは、ニューヨークのドイツ劇場の装飾画《ハーモニー》へとつながっていきます。ミュシャはこうした神秘や信仰をテーマにした作品によって、スラヴ民族の平和を願った《スラヴ叙事詩》にもつながる壮大なテーマを探究していたのかもしれない。



《ハーモニー》1908年 油彩・カンヴァス 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

### 旅の終着点 ～独立と平和を求めて～

End of the Journey : ~ Seeking Independence and Peace ~

1910年、ミュシャは《スラヴ叙事詩》を制作するために、アメリカの旅からチェコに帰国しました。ミュシャは本作の制作で多忙な中、祖国チェコとスラヴ民族のために様々な作品を制作します。1911年に完成し、やがて独立国家チェコの象徴となるブラハ市民会館の市長の間の内装デザインを手がけ、また1918年に独立したチェコスロヴァキア新政府のためには、紙幣や切手などを無償でデザインしました。さらに、チェコと国境を越えたスラヴ民族のため、非商業的・慈善目的のポスターを多数描きました。ミュシャの生涯の旅の終着点は、祖国とスラヴ民族に独立と平和が訪れるという願いを叶えることでした。



《10コルナ紙幣》1927年 紙幣  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵



《1918-1928：独立10周年》1928年 リトグラフ、紙  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

# mucha

# ミュシャ。

# Labo

年間シリーズ展

## ミュシャ Labo とは？

「ミュシャLabo」は、ミュシャを実験的なまなざしで紹介する年間シリーズ展。

当館3階展示室を「小さな実験室」ととらえ、

あたらしいミュシャの魅力と出会うために、

作品に潜むギモンやフシギを探求する展示です。

2022年度は、各企画展の会期に合わせて、3つのテーマで展示を行いました。

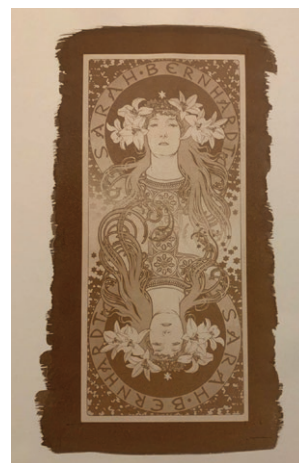
## #01 絵⇔写真

会期：2022年4月9日【土】～7月31日【日】

第1弾のテーマは「写真」。ミュシャは作品制作に自らが撮影した写真を活用していました。本展では、あまり知られていないその制作プロセスに焦点を当て、モデル写真と完成作を比較検証しました。さらに、古典写真作家・若林久未来をゲストに迎え、ミュシャを題材に完全手作業で仕上げた新作を初出品。古典的な写真技法（ヴァンダイクプリント）、また古典とデジタルを融合させたオリジナル技法によってミュシャ作品に新たな息吹を吹き込んだ作品を展示することで、ミュシャの絵と写真の相互的な関係性を考える機会となりました。

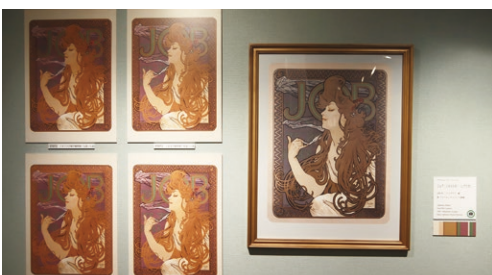
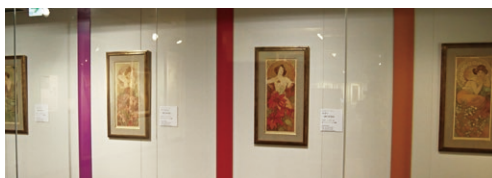
### PROFILE: 若林久未来

大阪生まれ、古典写真作家。自身の制作活動に加え、古典写真技法の普及と伝承のためにclassical photograph®という創作分野を提案し、新しい芸術分野に育てるための活動も行う。



## #02 色＋線

会期：2022年8月6日【土】～11月27日【日】



第2弾のテーマは「ミュシャの色と線」。展示は「ミュシャの絵の色はなぜ上品なのに印象的なのか？」の問いからスタート。当時の批評家からも称賛された、ミュシャの色彩美に注目しました。一般的な色相環図や配色図を用いながら、ミュシャの絵の色合わせの魅力を「補色」「明度」などの観点から検証。コレクションを色彩理論的に観る新しい試みとなりました。

さらに、ミュシャにとって大きな特徴である「線」にも注目。輪郭線をはじめ、印象的なミュシャの線を階層分けして順に消してみることで、画面にもたらず線の効果を探る実験も。

作品の細部を観察することで、来館者の方も一緒にミュシャの絵の魅力を考察していただく展示となりました。



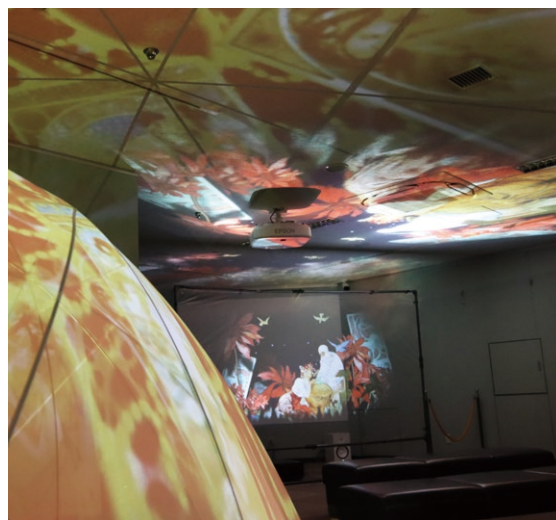
# #03 ミュシャ×メディア

会期:2022年12月3日[土] ~ 2023年4月2日[日]

19世紀末のパリの“広告メディア”、ポスターで有名になったミュシャ。その当時の“雑誌メディア”『La Plume』誌が伝えた批評の言葉とともに、同誌にも掲載されたミュシャの作品を展示しました。

さらに、関西大学総合情報学部有志ゼミ(堀雅洋ゼミ、林武文ゼミ、井浦崇ゼミ)のご協力により、現代の“映像メディア”技術でミュシャを表現していただきました。

プロジェクションアートやVRによる表現で新たなミュシャの魅力を感じ取っていただく機会となりました。



## ミュシャLabo と レプリカ作品

「ミュシャLabo」の展覧作品は、その多くをレプリカ(複製画)が占めます。レプリカとは、当館所蔵の本作品(ミュシャが制作した当時のもの)の画像データをもとに、現代の印刷技術で複製したものです。当館のコレクションの多くは繊細な温湿度、照度の管理を要し、作品の保存と活用の両立が求められます。3階展示室は従来レプリカ展示が中心でしたが、ただ飾るだけでなく、レプリカを使って新しい発見や学びを提供したいという思いから、シリーズ展「ミュシャLabo」を展開しました。

## 関連イベント

### ・ワークショップ『サイアナタイプフォトグラム』

| 日時 | 2022年6月11日[土]10:30~/13:00~/15:00~(各回90分)

### ・ワークショップ『おやこでづくり青写真』

| 日時 | 2022年7月16日[土]・18日[月・祝]各日10:30~/14:00~(各回90分)

講師: 若林久未来(古典写真作家)

「#01 絵⇄写真」の会期中、古典的な写真技法である「フォトグラム」のワークショップを行いました。フォトグラムとは、カメラを使わずに直接印画紙の上に物を置いて焼付けを行う技法です。今回は、青写真、日光写真とも呼ばれる「サイアナタイプ」技法にチャレンジ。まず、ミュシャモチーフのネガフィルムやリボン、スパンコールなどを選んでコラージュし、暗室で光に当てます。そして水や薬に浸すと、印画紙は鮮やかなブルーとなり、絵柄は白く浮かび上がります。それぞれのセンスが光る、素敵な写真ができました。



## 教育普及活動

ミュシャ館ではここ数年、教育普及活動の一環として学校施設へのアプローチを積極的に行っています。今年度は堺市内の小学校の他、大阪府下の高校や府外の美術科やファッション関係の高校、専門学校や大学など多くの学生のみなさまにご来館いただき、また当館からも学校での出張鑑賞授業を行いました。

### 校外学習などでの団体来館

学校からの団体来館の際には、当館の説明や作品解説とともに、気になる作品を見つけてもらえるように、必ず自由に鑑賞する時間を作ってもらっています。



企画展に合わせたシールラリーで楽しむ小学生



### 出張授業 & 出張ワークショップ

来館が難しい学校には、ミュシャ作品のレプリカやタペストリーを教室に持ち込んでの鑑賞会や、ミュシャのモチーフを使った人気のワークショップでミュシャに親しんでもらう取り組みも行っています。



教室で鑑賞会

### 鑑賞教育ツール Mu-CUBE(仮称)開発中

関西大学総合情報学部 堀雅洋教授とゼミ生の協力のもと、小学校向けにミュシャ館オリジナルの貸出用鑑賞教育ツールを開発中です。キューブ型のパズルでその名もズバリ Mu-CUBE(仮称)。作品の細部に注目しながら、ピースを合わせて作品を完成させ、さらに実物の作品鑑賞につなげることを目的としています。

今年度は試作品を企画展開催中に設置し、体験してもらったり、実際に小学校で子どもたちに使ってもらって参考にしたりと、本制作に向けての試行錯誤を行いました。



### 教育機関等での美術館鑑賞をご検討のみなさま

ミュシャ館は、子どもたちの美術鑑賞を応援しています。

学校からの団体来館、出張授業やワークショップ他、図工、美術科の研修会などお気軽にご相談ください。

## 主な作品修復報告

ミュシャ館では修復家と連携しながら約500点の所蔵作品のコンディションを常に把握し、優先度の高い作品から順に修復を行っています。ここでは、修復を行った作品の一部をその内容とともにご紹介します。



### クオ・ヴァディス

1904年 油彩、カンヴァス  
2375×2185mm  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵



森絵画保存修復工房にて大型油彩画《クオ・ヴァディス》を含む4点の油彩画・版画が修復されました。《クオ・ヴァディス》は、1979年に画布の折れや裂け、穴が生じた状態で発見された後、アメリカで修復されたことがわかっています。しかし、その際に補彩されなかった傷が複数認められ、その傷の周辺部が微小な欠損になって部分的に浮き上がり、不安定な状態でした。今回、こうした絵画層に剥離止めを施し、水彩絵具で補彩したほか、画面のきわにある画布の浮き上がりを接着しました。



### 三匹の猫

1896年 リトグラフ、紙  
836×660mm  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

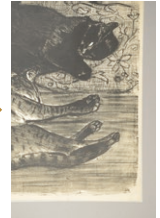
27点の版画やデッサン、水彩など紙に描かれた作品が山嶺絵画修復工房にて修復されました。ここではアレクサンドル・スランラン(1859-1923)による《三匹の猫》をご紹介します。

本作の紙面は全体的に劣化が進んで脆い状態で、特に左右上下の辺に折れ跡や細かい破れが無数にありました。また酸化による黄変が目立ち、作品面に汚れが堆積していました。修復では、まず汚れの除去や水洗を行い、その後破れの接合や形状を整える作業が行われました。

BEFORE



AFTER



### クリスマスと復活祭の鐘

1900年 書籍  
298×223mm  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

BEFORE



AFTER



3冊の書籍がNPO法人「書物の歴史と保存修復に関する研究会」にて修復されました。そのうちの1つ『クリスマスと復活祭の鐘』は、背表紙が大きく破れて破損していました。またページの小口(書物の背の部分を除いた三方の辺)もギザギザと不揃いでした。修復では、書籍の綴じを解体後、割れた背表紙を染めた和紙で継ぎ、裏表紙と表紙をつなげました。さらに小口の形をやすりで整え、もう一度綴じの作業が行われました。



### 修復と展示

企画展「ミュシャとおとぎの国の姫君たち」では、綴じ糸の劣化を補修するために、ページをばらした修復途中の『トリボリの姫君イルゼ』(仏語版)の展示が実現しました。通常修復中の作品は展示することができませんが、ミュシャが全ページを手掛けた挿絵の美しさを当時の印刷で一堂にご覧いただきたく、各ページの状態や長期の展示への影響などを修復家と確認しながら、展示に至りました。

企画展終了後、主にオリジナルに戻すことの重要性和ページの散逸の危険性を考え、綴じ糸が再建され、元の状態に修復されました。

講演等

上田市立美術館講演会

ミュシャ・スタイル  
ーポスターに込めたミュシャの美学ー

日時：2022年5月14日(土)14：00～15：30  
場所：上田市立美術館  
講師：原田悠里(堺 アルフォンス・ミュシャ館 学芸員)

上田市立美術館で開催された企画展「アルフォンス・ミュシャー煌めきの女神たち」の関連講演会に登壇しました。当館の所蔵品と出品されているOGATAコレクションの中から、ミュシャを代表するポスター作品を中心に、美しさや優雅さといった印象にとどまらないミュシャの緻密で細やかな表現手法に注目した内容をお話しました。



堺市東京事務所 & 関西大学イベント

ミュシャ 東京駅に出現！

日時：2022年11月19日(土)14：15～15：15  
場所：関西大学東京センター  
講師：原田悠里(堺 アルフォンス・ミュシャ館 学芸員)

東京での堺市PRイベントの一環で講演会に登壇。当日は関西大学総合情報学部の学生さんが制作したデジタルサイネージのお披露目やVRでのミュシャ館体験と合わせて、「ミュシャ・スタイルの魅力」としてミュシャの生涯とポスター作品の魅力についてお話しました。



学芸員対談

癒しと再生を考える  
ー文化と自然ー

さかい利晶の杜 YouTube  
にて対談の様態を  
ご覧いただけます  
(配信終了日未定)



日時：2022年12月18日(日)14：00～15：00  
場所：さかい利晶の杜  
講師：高原茉莉奈(堺 アルフォンス・ミュシャ館 学芸員)、  
矢内一磨(さかい利晶の杜 学芸員)

さかい利晶の杜で開催の企画展「与謝野晶子×吉田初三郎 与謝野晶子の温泉紀行」の関連イベントとして、同館学芸員の矢内氏との対談イベントに登壇しました。「自然」についてのミュシャの言葉を紹介しながら、堺市にゆかりのある与謝野晶子や吉田初三郎の「自然」観と重なり合う部分を探りました。



NHK オンライン講座

誰かに話したくなる  
アルフォンス・ミュシャの秘密

日時：2023年2月18日(土)16：00～17：30  
講師：高原茉莉奈(堺 アルフォンス・ミュシャ館 学芸員)

NHK文化センター浜松教室からの依頼により、全国配信のオンライン講座に登壇しました。ミュシャの生涯にまつわる「30の秘密」を解き明かしながら、豊富な図版と作品解説を交えて、当館コレクションの魅力をお伝えしました。



寄稿

時事通信社美術連載

世紀末のパリ、スラヴへの眼差し  
～アルフォンス・ミュシャ～

時事通信社からの依頼により、全10回の美術連載記事を寄稿しました。学芸員3名が当館の主要コレクションを解説。全国の地方新聞社の紙面やその電子版に配信されることで、日本中の方にミュシャ館を知っていただく機会となりました。

- 第1回 パリを魅了したデザイン-堺市に珠玉のコレクション-(M.T)
- 第2回 あらゆるものを擬人化-部屋を彩る「四季」-(M.T)
- 第3回 時代見守る静かな表情-彫刻になったカレンダー-(M.T)
- 第4回 秘められた恋心を描く-クオ・ヴァディス-(M.T)
- 第5回 控えめな色や線 個性に-ジズモンダ-(Y.K.)
- 第6回 ポスターからジュエリー-蛇のプレスレットと指輪-(Y.K.)
- 第7回 人間、世界の大きい調和-ハーモニー-(Y.K.)
- 第8回 悲恋の物語 幻想的に描く-トリポリの姫君イルゼ-(Y.H.)
- 第9回 国の歴史を壁画に-パリ万博のボスニア・ヘルツェゴビナ館-(Y.H.)
- 第10回 故郷を心のよりどころに-ウミロフ・ミラー-(Y.H.)

東奥日報連載記事

アルフォンス・ミュシャ展

青森県青森市にて開催された特別企画展「アルフォンス・ミュシャ展」の開催に際して、主催者の東奥日報社からの依頼により、ミュシャについての3種類・計17回の連載記事を寄稿しました。

- |  |   |  |
|--|---|--|
| 1<br>代表作紹介(M.T)<br>連載：2022年6月14日(火)<br>～6月19日(日)<br>(1)夢見/シャンブア<br>(2)黄道十二宮<br>(3)ジョブ<br>(4)モナコ・モンテ=カルロ<br>(5)夜明け・黄昏<br>(6)《スラヴ叙事詩》展 | 2<br>生涯と創作活動(Y.K)<br>連載：2022年7月4日(月)<br>～7月8日(金)<br>(1)修業時代<br>(2)パリ時代<br>(3)1900年パリ万博<br>(4)アメリカ時代<br>(5)チェコ時代 | 3<br>暮らしの中の宝物箱(Y.H)<br>連載：2022年8月11日(木)<br>～8月16日(火)<br>(1)ランス社の香水「ロド」<br>(2)LU社のビスケットパッケージ<br>(3)モエ・エ・シャンドンのメニューカード<br>(4)パリー フランス百貨店の有価証券<br>(5)独立記念の切手と紙幣<br>(6)チェコのためのポスター |
|--|---|--|



東奥日報社 HP  
記事は2023年  
8月末ごろまで  
公開されています。

作品貸出

大阪中之島美術館への作品貸出

「ロートレックとミュシャ パリ時代の10年」展  
展覧会会期：2022年10月15日(土)～2023年1月9日(月・祝)  
場所：大阪中之島美術館

『白い象の伝説』の挿絵下絵など、当館の所蔵作品6点を貸出しました。展覧会自体の出展作品は、ポスターなどのリトグラフが中心でしたが、当館からは素描・下絵作品を出品することで、ミュシャの精緻なデッサンの魅力を知っていただく機会となりました。



初めての年間講座を開講！

学芸員がミュシャ作品の楽しみ方を企画展やテーマにそって図版を用いてたっぷりレクチャーする全6回の年間講座「学芸員によるはじめてのミュシャ」を実施しました。これをきっかけにミュシャを知りたいという方から、ミュシャファンの方まで28名にご参加いただき、全ての講座を受講された方には修了証をお渡ししました。各回60分、全6回の講座の概要をご紹介します。



第1回

I はじめてのミュシャ/  
II ミュシャヴィーナスの表情

5/22  
sun

はじめてミュシャ作品を鑑賞される方々に向けて、代表的なポスターから素描・油彩画、彫刻・宝飾品にいたるまで、当館コレクションの全貌をつかんでいただきました。年齢別に作品をご紹介します。年齢別に作品をご紹介します。年齢別に作品をご紹介します。年齢別に作品をご紹介します。

た女性の「表情」に注目。目元や口元をクローズアップしながら見ていくことで、浮彫りとなる“アンニュイ”な魅力を味わいました。(M.T.)



第2回

19世紀の美術と  
ミュシャ

7/10  
sun

ミュシャの概要を講演した第1回目の講座に引き続き、第2回目では、ミュシャが活躍した19世紀後半の美術の流れについてお話ししました。内容はミュシャに関わりのあるポスター芸術や装飾芸術の流行、歴史画についてです。当時の美術を取り巻く時代背景を踏まえながらミュシャ作品の魅力を知っていただく

かけとなったのではないのでしょうか。(Y.K.)



第3回

ミュシャの人物表現と  
物語の世界

9/11  
sun

企画展「ミュシャとおとぎの国の姫君たち」の見どころを作品を通して紹介し、ミュシャの人物像の表現についても解説。企画の発端となった『トリポリの姫君イルゼ』と『ボスニア・ヘルツェゴビナ館の壁画(下絵)』や、演劇ポスター作品での人物の表情や装飾モチーフの使い方、美術史の中で描き続けられてきた『サ

ロメ』の比較など一点一点の作品についてじっくりお伝えしました。(Y.H.)



第4回

ミュシャの色彩  
—ミュシャLabo#02「色+線」

11/12  
sat

線の画家として知られるミュシャですが、ここでは繊細な色彩美に注目。アメリカで教えたミュシャの講義内容を手がかりに、ミュシャ自身が確立した色彩論を読み解きながら、館所蔵作品の色使いを検証していきました。ミュシャの絵に補色のテクニックが多く用いられていることなど、創作の秘密を知っていただけたの

ではないでしょうか。参加者の皆さまと一緒に科学的な目線で鑑賞をするという、まさに「Labo」な60分となりました。(M.T.)



第5回

Bon Voyage!  
～ミュシャと巡る旅～

1/22  
sun

企画展「Bon Voyage!～ミュシャと巡る旅～」の見どころや展示会の成り立ちの経緯など、展示会ではご紹介しきれなかった作品や資料を含め、企画展をより深く楽しんでいただけるお話をしました。前半では商業ポスターやジュエリーなど世界各地にゆかりのあるミュシャ作品とともに、後半ではミュシャの画

家人生に影響を与えた宗教やスラヴ民族に関わる作品とともに、ミュシャの作品と人生を巡るお話を楽しんでいただきました。(Y.K.)



第6回

チェコの  
ムハ・スタイル

3/12  
sun

ミュシャの強いアイデンティティであるチェコ人、スラヴ人としてのバックボーンにせまりました。チェコで育った文化的、時代的背景を説明しながら、民族衣装やチェコの装飾文化、教会とのつながりなどミュシャ作品への影響を探りました。最後ということであらためてミュシャの人物像と創作の源にふれていただき、

全6回の講座のしめくくりとしました。(Y.H.)





## 作品介绍

### おばあさんたちの物語

1892年に出版された『おばあさんたちの物語』は、フランスの探検家としても知られるクサヴィエ・マルミエ(1808～1892)がグリム童話など、ヨーロッパ各地で採集した昔話、33話を収めた児童書である。ミュシャはパリの出版社ジュベから依頼を受け、『おばあさんたちの物語』に55枚の挿絵を描いた。

確かなデッサン力に裏付けられた描写力と表現力ですでに挿絵画家として評価を得ていたミュシャは、童話においてもその世界観を効果的に描いている。

貴重な下絵から見て取れるのは、墨と水彩のモノクロによる、やわらかいグラデーションで色を使いわけ、さらに光の部分は白のハイライトを効かせ、写実的なながらもキャッチーな人物像と立体的な構図である。

ドラゴンにさらわれてしまう姫の物語「黄金の髪のヴァ

シリサ」で描いたのは、ヴァシリサ姫の末の弟イワンが、ドラゴンを退治した場面。左下から右上に向かう対角線の構図によって画面に奥行きが生まれ、背景を描かずとも巨大なドラゴンとイワンの身体の対比を巧みに表現している。滴る血やドラゴンの鱗の質感も生々しい。また、病に苦しむ王を救うため、不死鳥の歌声を探る旅に出る王子の物語「不死鳥」の魔法で熊にされていた隣国の王子が姿を現す場面。熊を切りつけてしまったショックで泣き崩れる王子と、現れた王子にのけぞって驚く姫君の表情を印象的に描いている。床のタイルや衣装の細かな描きこみは、その後のポスターにもつながる装飾美を感じる。



物語を追いながら、想像するキャラクターがふとイメージを超えて登場する楽しみは挿絵ならではの。そんな読者の期待を裏切らないミュシャの挿絵にも注目してほしい。(Y.H.)

リアルな描写と魅力的なキャラクターで物語にひきこまれます！



### ブルネット： ビザンティン風の頭部

まっすぐな眼差しと、わずかに開いたくちびる。この組み合わせの横顔は、ミュシャが描いた数多の女性像から探しても他に見当たらない。暗色の髪の彼女だけに許された表情である。

《四季(1896年)》を発表して以来、ミュシャは2人1組または4人1組の装飾パネルを多く描いた。ブロンドとブルネット、立ち姿と腰かけた姿、力強い眼差しとアンニュイな伏し目——これらのコントラストは、セット作品として人々を魅了した。1898年頃までの女性像は、口元を開いて微笑む姿も多く、生き生きとした表情を浮かべている。しかしミュシャの様式美は次第に洗練されていき、1899年以降の女性像は口元をきゅっと結び、理想化された彫像のような、厳かな雰囲気をも

うようになる。この短期間での作風の変化は、ミュシャの意識がアカデミックな芸術に回帰しつつあったことを感じさせる。あるいは、多忙を極めていたミュシャが編み出した、自ら撮った写真をもとにポーズを転用する仕事術の影響もとらえられる。

本作《ビザンティン風の頭部》は、2点で対を成す装飾パネルの原型で、様式化が進む前の1897年の作。目を伏せて微笑むブロンドの女性に対し、ブルネットの彼女は、目そしてくちびるを開く。円形フレームの前面に垂れた渦巻く髪が、装飾の中に閉じ込められた彼女の瞬間の表情へと私たちを誘う。彼女はこの瞬間、何を想い、何故くちびるを開きかけたのだろうか？(M.T.)

画面の華やかさに潜む繊細な表情に心奪われます



アルフォンス・ミュシャ  
《ブルネット：ビザンティン風の頭部》1897年  
リトグラフ、紙 堺アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

### 瞑想

本作はミュシャが女優サラ・ベルナールの演劇ポスター《ジスモンダ》によって、デザイナーとしてパリで華々しくデビューした翌年1896年に描かれた作品である。東屋の下のようにも見える、草木が生い茂る静かな場所のベンチに腰掛け、下を向いて瞑想に浸っているように見える女性は、赤いコルセットと白の裾の長い衣を身に着けている。右上腕には、プレスレットもしくは入れ墨の模様が入っている。そして《瞑想》の画面全体は暗く深い青色で満たされており、2年前に描かれた《ポエジー》(p.14参照)とも共通する幻想的な雰囲気立ち込めている。このような作風は、19世紀末に流行した内面的世界を象徴的に表現しようとする象徴主義芸術との関わりを感



アルフォンス・ミュシャ《瞑想》1896年 水彩、カンヴァス  
89.5×140.2cm 堺アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

じさせる。《瞑想》で座る女性の前には指輪のような金色の輪が落ちており、何かの物語の場面を表しているようにも思われる。本作と同年に制作された《女預言者》(図1)は、女性の衣装やプレスレットのデザインが共通していること、そして作品サイズがほぼ同じことから、《瞑想》の対となる作品である可能性が



図1 アルフォンス・ミュシャ《女預言者》1896年 テンペラ、カンヴァス  
87×138cm  
出典：Sarah Mucha, *Alphonse Mucha*, Frances Lincoln, 2005, P.102

ある。2作品を左右に並べると、2人の女性は対をなすような、呼応したポーズをとっているようにも見える。(Y.K.)

神秘的な作品の魅力に注目！

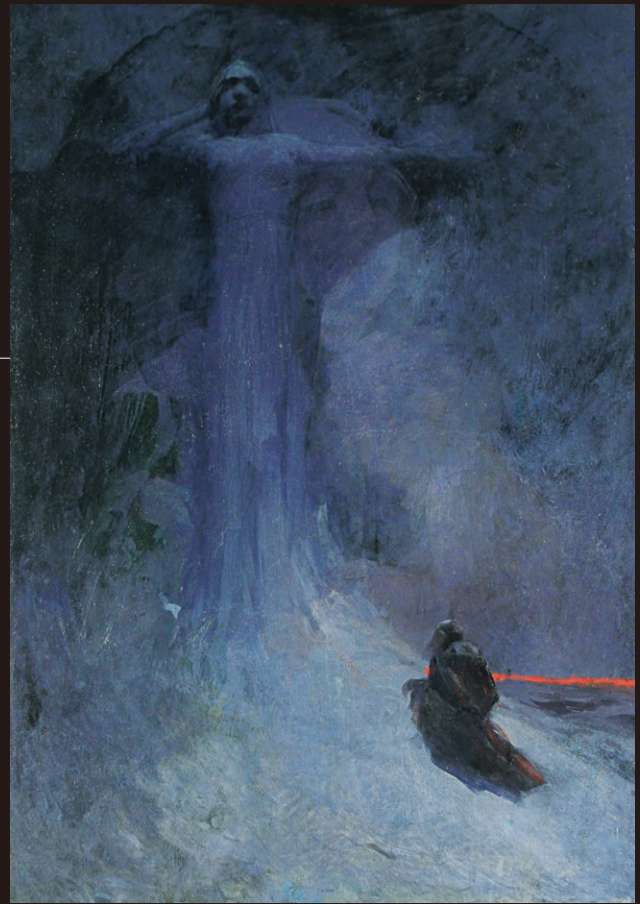


## 作品《ポエジー》と その下に描かれた 絵画について

所蔵作品《ポエジー》の修復時に本作を赤外線撮影した際、下から母子像と思われる別の作品が現れた(図1)。ミュシャの生前、未発表であった本作は、何のために描かれた作品なのかほとんど情報が残っていない。今回のコラムでは、改めて本作に注目してみたい。

両手を横に掲げ、地面から現れ出たこの世のものとは思えない人物。頭から長い衣を身に着け、顔は影に沈んでいる。大地から生まれ出た巨大な彫像のようだ。その手前にいるマントを身に着け長い髪が生えたようにも見える小さな人物は、この大きな像に向かって跪き、祈っているようにも見える。同じ頃、画家ポール・ゴーギャン(1848-1903)とも交流があったミュシャだが、本作は世紀末の象徴主義的な雰囲気が反映されている。産業革命を経て社会が近代化し、物質的に豊かになった19世紀後半のヨーロッパ。しかし逆に目には見えない思考や精神性が重視されるようになり、芸術家たちはそれらを作品で表現しようとし、おぼろげな夢の世界を表したような作品も多く描かれた。本作も異世界の雰囲気がただよう。全体的な色合いは2年後の1896年に制作された《瞑想》(p.13参照)のように深い青色で統一され神秘的な印象を放っている。ミュシャは後に描く1900年パリ万国博覧会のボスニア・ヘルツェゴビナ館の壁画や歴史大作《スラヴ叙事詩》においても、神々が登場する神話の世界を青色で表現した。

本作とよく似た構図の作品が1894年発行のチェコの雑誌『ズラタ・ブラハ』誌に掲載されている(図2)。輝く教会の上に天使が腰掛けており、前景には跪いたり、立って祈る姿の4人の巡礼者がいる。彼らは天使に向かって祈りを捧げている。優雅な女性像のポスター画家として有名なミュシャだが、彼はキリスト教に関わる作品を、生涯を通じて多く描いている。20代半ばにはアメリカ、ノースダコタ州にある教会のためにチェコの聖人を描き、また30歳の時には聖母子像の習作も残している。売れっ子デザイナーとして多忙を極めていた39歳の時には、キリストが弟子に教えた祈りの言葉をオリジナルに視覚化した書籍『主の祈り』を自主的に出版。本書がきっかけで宗教画家としても有名になり、オファーを受けたエルサレムに建設予定だった聖母マリア教会のステンドグラスをデザインした。この作品は後の大型油彩作品《ハーモニー》や《百合の聖母》といった作品につながった。そして44歳で渡米してからも、いくつか教会のための作品を残している。ミュシャは少年時代に教会の聖歌隊として活動し、教会で長い時間を過ごした。「絵を描くこと、教会へ行くこと、そして音楽の3点は密接にむすびついていた。」と後に当時を振り返って述べて



アルフォンス・ミュシャ 《ポエジー》1894年 油彩、カンヴァス 645×450mm  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵



図1 赤外線撮影によって《ポエジー》の下から現れた絵  
(撮影：森絵画保存修復工房)



図2 『ズラタ・ブラハ』誌(1894年)に掲載されたミュシャの作品《聖夜》

いるように、彼の芸術制作の原点には教会で過ごした時期が影響していることが窺える。このように生涯にわたって信仰をテーマとした作品に携わっていたミュシャ。彼が《ポエジー》の下にヴェールを被ったマリアと幼子のイエスを描いたとしても不思議はない。

《ポエジー》の下に描かれた母子像は、実はよく目をこらすと肉眼でもうっすらと確認できる。《ポエジー》の大きな人物像と母子像は位置がちょうど重なるように描かれており、手前の小さな人物が祈りを捧げる対象は、母子像に入れ替えて見るができなくもない。《ポエジー》と母子像は一体どんな目的で描かれ、さらに2作品には何か関係性があるのか、今後調査を進めていきたい。(Y. K.)

## クラウドファンディングプロジェクト

### 「ミュシャ×堺緞通」

堺 アルフォンス・ミュシャ館では2021年度にクラウドファンディングプロジェクト「ミュシャ×堺緞通」を実施しました。1910年頃、絨毯の絵柄とする計画があった《クオ・ヴァディス》。かつて果たされなかった構想を、現在、本作を所蔵する大阪・堺の伝統技術である「堺緞通」で織り上げ、実現させようという試みです。その結果、多くの方に賛同いただき、総額522万1,000円もの寄附金が集まりました。

今年度は、このご支援金の一部を使用し、《クオ・ヴァディス》の光学調査を実施しました。画面に赤外線や紫外線を当て、通常光では見えない下層部や、後年の加筆部分の確認を行いました。その結果、ミュシャ自身によって1920年頃に描き変えられた箇所が明らかとなりました。例えば、香炉から立ちのぼる煙は、当初は複雑に描かれていましたが、後年になって量感が調整されたことが分かりました。さらに、顕微鏡による細部観察では、少女の右足が描かれた部分に針のようなもので刺した小さい穴が発見されました。この穴は、全体画面の対角線・中央線の交差点と完全に一致したことから、ミュシャが構図を決めるガイドとして中心に穴を開け、全体の構図を整えた可能性があることが分かりました。今回の結果をもとに、文献と照らし合わせながらさらに調査を進めたいと考えています。2024年中に実施予定の特別展「クオ・ヴァディスの謎(仮)」を楽しみにしていただけますと幸いです。

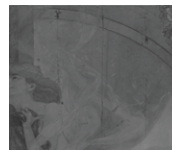
※製織作業を担う大阪事務所内の新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、堺緞通の制作は大幅に遅延しております。完成は2024年度中旬を予定しております。



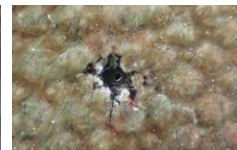
クラウドファンディングサイト  
「READYFOR」  
プロジェクトページはこちら



《クオ・ヴァディス》1904年 油彩・カンヴァス  
堺 アルフォンス・ミュシャ(堺市)蔵



赤外線写真  
加筆前の煙部分



画面中央の穴

### [表紙作品]

アルフォンス・ミュシャ 《ブルネット：ビザンティン風の頭部》1897年 リトグラフ、紙  
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

執筆・編集 川口 裕加子(Y.K.) 高原 茉莉奈(M.T.) 原田 悠里(Y.H.)  
発行 公益財団法人堺市文化振興財団 堺 アルフォンス・ミュシャ館  
デザイン・制作・印刷 株式会社大伸社  
発行日 2023年4月1日

## 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

開館時間 9時30分-17時15分(入館は16時30分まで)  
休館日 月曜日(休日の場合は開館) 休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館)、年末年始、展示替期間  
観覧料 詳しくは公式ウェブサイトをご参照ください。  
交通 JR 阪和線堺市駅下車徒歩約3分  
JR 快速にて・大阪駅から約25分・天王寺駅から約10分  
和歌山駅から約60分・関西国際空港駅から約40分



<https://mucha.sakai-bunshin.com/>

590-0014  
大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ヘルマージュ堺式番館  
TEL 072-222-5533 FAX 072-222-6833

